

新聞を家族で読もう そしてスクラップを—

長野県新聞活用教育推進協議会会長
信州大学教育学部教授

渋沢 文隆



私が所属する関東・甲信越エネルギー教育推進会議が、昨年、エネルギー・環境問題に関する新聞スクラップ作品コンクールを開催しました。その際、発達段階等に配慮し、「小学生・保護者部門」「中学生部門」「高校生以上部門」（社会人を含む）という3部門を設定して募集しました。

「小学生・保護者」部門としたのは、言うまでもなく大人用の新聞を対象にしていることに配慮したからです。そこには「小学生の関心、課題意識に基づいて、それを保護者が支援し、まとめるようにする。主体は小学生であること」という注意書きを添えました。周知が不徹底なこともあって、この部門の応募は川崎の女子児童2名による作品1点のみでした。しかし、その1点はとても印象深い作品でした。

記事は4つだけで、それよりもキャプションの方が大きな割合を占めており、スクラップ作品としてはちょっと問題の残るものでした。でも、そのキャプションを読むと、いずれも「この記事は…」、この記事を見て「わたくしは…」から始まる2部構成で書かれており、そこには伝えようとする児童の思いがあふれていました。

おそらく、仲良しの2人に保護者が加わって、力を合わせて記事を精読し、それから感じることや考えることを話し合い、何度も吟味してまとめたものと思います。そうした作品づくりの光景を思い浮かべると、そこに日本のNIEが目指す姿があるのではないかと思います。

日本では新聞購読は宅配が基本になっています。ほぼ毎日届く新聞を、家族が思い思いに開いて読む。そこに子どもも加わり、こんな宿題が出されているんだなどと紹介し、気になるニュース、関心のあるニュースについて問い、語り合う。そしてスクラップする。それを時々見返す機会をつくる。ある時期になったら、しっかり振り返り、コンクールに出す作品づくりを家族総出で行う。ただし、学校の宿題の一環だから、あくまでも子どもを主役に。こんな活動が日々各家庭で行われたら、心豊かな生活を営むことができるように思われます。

さまざまな組織、機関が作文コンクールを開催しているように、新聞スクラップ作品コンクールもさまざまな組織、機関がそれぞれの思いを込めて開催し、家族総出の活動を促し、新聞スクラップを日常化するようにしたらどうでしょうか。毎日、新聞を開いて読む、スクラップする、この営みを継続することがNIEを推進する礎となるはずですから。

最後になりましたが、今年も貴重な取り組みが各指定校で展開されました。それを収録した本誌を熟読していただき、実践に生かしていただければ幸いです。ご多忙の中で研究実践に取り組み、ご執筆いただいた皆様に感謝、御礼申し上げます。